昭和13年7月洪水

昭和13年（1938年）7月5日

昭和13年（1938年）は、例年に比べて大雨や集中豪雨が多く、水害が全国各地で発生しました。
6月末から7月初めにかけての梅雨末期の豪雨により、神戸市、阪神地区をはじめ各地で大水害が発生し、
「近代都市型水害」の最初だといわれています。天竜川の堤防も破堤寸前の危険な状態となりました。

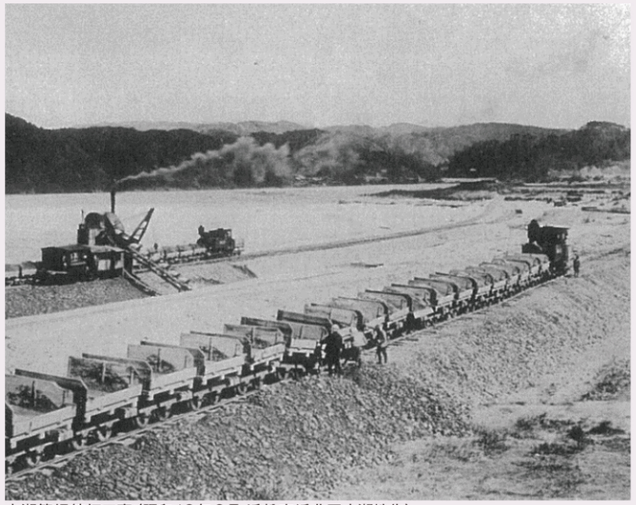
明治以降、近代化された各地の都市で発生した「近代都市型水害」。浜北区上島地先の堤防が70mにわたって決壊。

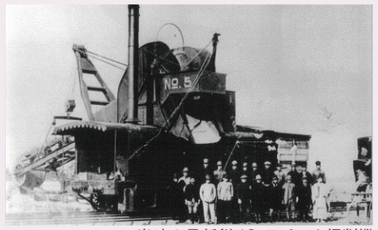
当時、日本列島南岸に停滞していた梅雨前線が、南の海上から北上して来た熱帯性低気圧に刺激されて、各地に大雨を降らせました。6月末の大雨の中心は関東地方で、利根川などの河川がはん濫、7月に入ると、中部から近畿地方にかけて大雨の中心となり、家屋の倒潰、流失や浸水、がけ崩れなどの被害が相次ぎました。6月28日から7月5日の8日間に水窪583mm、浜松419mm、二俣404mmの雨量を観測し、この大雨により天竜川がはん濫しました。

洪水発生前の天竜川

浜松市浜北区上島地先（昭和8年9月）

築堤工事風景（昭和7年頃）


中瀬築堤締切工事（昭和12年3月 浜松市浜北区中瀬地先）

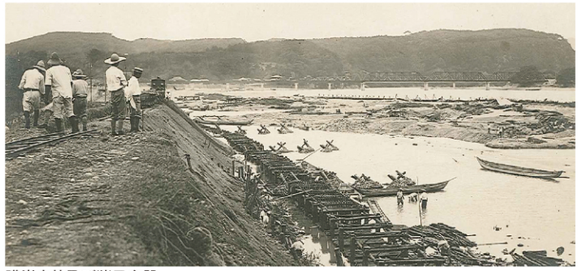


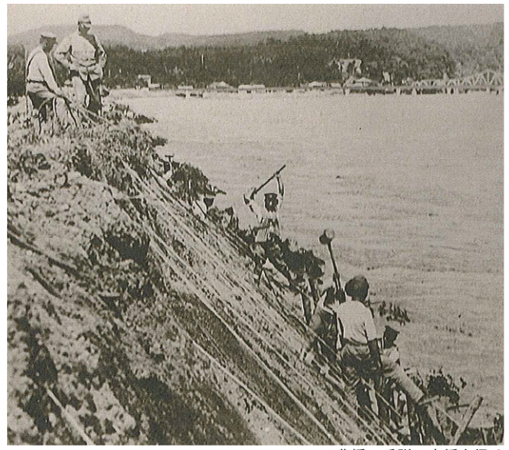
当時の最新鋭40tスチーム掘削機

天竜川出水状況（昭和13年7月 浜松市浜北区中瀬地先）

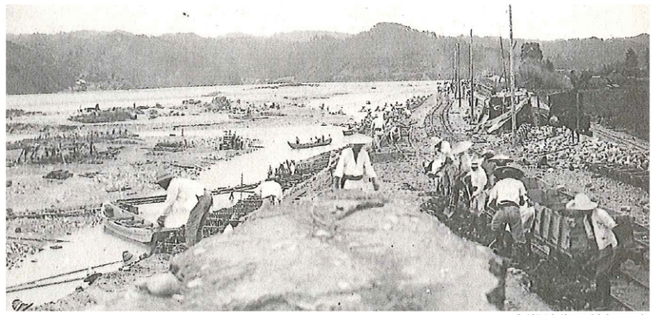
豊橋工兵隊による決死の水防活動！堤防断面の半分以上が決壊しつつも破堤を阻止。

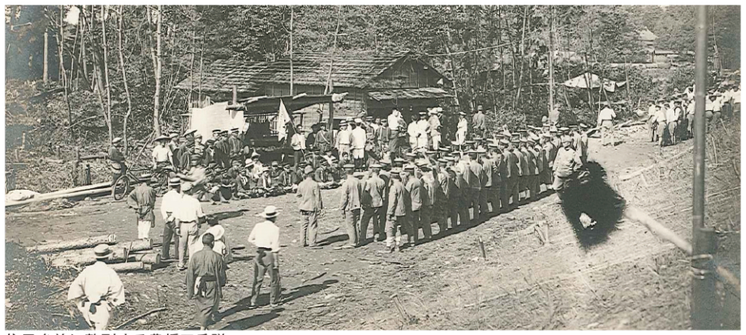
天竜川でも鹿島の水位が5.48mとなり、浜松市中瀬地先の堤防が裏小段まで飛ばされるなど河岸が70m余り決壊し、二俣で演習を行っていた旧日本陸軍豊橋工兵隊の応援による決死の水防活動により、堤防の決壊を食い止めました。


護岸立枠及び猪子布設


豊橋工兵隊の応援を得る

災害復旧工事に従事する人々


中瀬地先の締切工事


住民を前に整列する豊橋工兵隊